

モザンビークで総合農業開発プロジェクトが始動

農業の概要と国内格差

アフリカ大陸の南東部に位置するモザンビークは、2,400 kmに及ぶ長い海外線を有する南北に長い国です。南部は亜熱帯圏、中・北部海岸線は熱帯圏、西北部マラウイ寄り地方は高原性の冷涼気候帯にあります。国土の大半が年600mm以上の降雨地帯にあり、12の国際河川と3,600万ヘクタールに及ぶ耕作可能地を有しますが、実際の耕作面積はわずか400万ヘクタール強に過ぎません。主な作物はトウモロコシ、米、ソルガム、ミレット、キャッサバで、これら主穀、芋類の単位面積当たりの収量は周辺アフリカ諸国と比べて低位にあります。



中・北部に1000mm以上の降水量がある農業ポテンシャルの高い地域がありますが、道路が未整備であることと、南部で頻りに起る旱魃の影響もあり、自給を達成するどころか長年にわたり食糧援助の受け入れ国になっています。特に米については近年の消費の伸びに生産が追いつかず、毎年自給率が減少傾向にあるのが注目されます。国内で可能な範囲で米の増産をまず達成することが、道路網の整備ととも

に緊急の課題となっています。

モザンビークは首都圏と地方部の経済・社会インフラの格差が極めて大きい国です。この格差のために、政府機関の教育のある有能なエリート層が首都を離れて地方に勤務したがないという傾向があり、地方行政能力の強化が遅々として進みません。行政の小規模農家支援が行き届かず、開発の恩恵を多くは受けていないため、この国の小規模農家は周辺諸国と比べても営農キャパシティー、技術力が脆弱です。80%以上の労働人口を抱える農村部へは、技術協力による農業開発支援が重要なテーマと考えられますが、16年以上に及ぶ内戦の影響で蒙った社会・経済インフラのダメージが今も残っており、農業開発上の大きな障害となっています。



小規模農家の現状と発展の糸口

総人口のおよそ6割が農村に住みます。大半が一戸当たりの平均耕作地が1.3ヘクタールほどの小規模農家です。肥料、農薬がほとんど未使用、機械と役牛の使用率が低く、灌漑地の面積もその利



用も充分ではないため、周辺諸国と比べて農業生産性が低く、この小規模農家が営農を拡大発展させる力に欠けます。貧弱な農村インフラ、耕作放棄による土地、土壌の劣化、過少な耕作用役牛数など内乱の後遺症も残っています。小規模農家の営農の現状に立脚した技術開発支援と大規模農家向け機械化農業とは異なる取り組み、たとえば、牛飼育と役牛利用の普及・促進、より有機的な農業への転換、灌漑地の効率的な利用などが、現状を打開に導

くアプローチになると考えられます。そして、行政・研究機関から小規模農家への技術と知識の伝達が必ずしも円滑ではないため、この隔たりを埋める人材の育成と訓練が先行されるべきで、ここに人を介する援助、プロジェクトによる技術協力の必要性和重要性が指摘されます。

モザンビーク・ショクエ灌漑スキーム小規模農家総合農業開発

2007年3月から、モザンビーク南部ガザ州のショクエ灌漑スキームで、小規模農家を対象とするJICAの技術協力プロジェクトが始まりました。目的は、営農支援体制の整備、小規模農家に適した農業技術の開発と普及、灌漑水路を管理する水利組合の組織強化と水管理技術の向上を通じて、小規模農家の生計を向上させることです。

